

ベーオウルフ

Beowulf (8世紀頃)

作者未詳

[邦訳] 忍足欣四郎訳、岩波文庫など

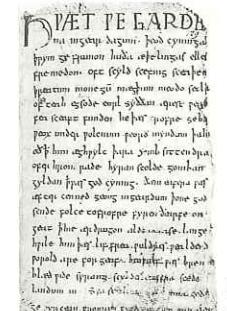
デネ人の国（デンマーク）の王は壯麗な館を造営し、日ごと宴を催す。兄弟殺しの罪を犯したカインの末裔で、近くの沼に棲む怪物グレンデルは、宴の賑やかなさざめきに不快を覚え、連夜この館を襲って殺戮を重ね、人肉を食らう。なすすべのないまま、館は賑わいを失い、12年の歳月が過ぎる。

対岸のスウェーデン南部、イエアート人の國の王の甥にあたる若者ベーオウルフは、惨状を伝え聞いて海を渡り、夜中、館に現われた怪物と一緒に打ちで闘い、その片腕をもぎ取る。瀕死の怪物は沼に逃げ去り、館は清められたかと思われた。しかし翌夜、怪物の母が館を襲って報復し、もぎ取られた息子の片腕を取り戻して沼に逃げ帰る。ベーオウルフは沼におもむき、水底の洞窟で怪物の母を打ち倒し、さらに怪物グレンデルの遺体を発見して首を切り取り、これを館に持ち帰る。ベーオウルフは偉業を称えられ、祖国に帰還する。

その後、ベーオウルフは祖国の王に即位して統治50年に及び、老王の身となる。しかしそのとき、火

を吐く竜により国土が荒らされる事態が出来する。人知れず宝物が埋蔵されていた塚があり、竜が300年にわたりこれを守ってきたが、竜が眠っている間にたまたま宝物を発見した者がその一部を持ち出し、目覚めてこれに気付いた竜が、誰が盗人であるか分からぬまま怒り狂って国土を荒らし始めたのである。

ベーオウルフは竜退治に向かう。従者十数人を引き連れてはいたものの、怪物グレンデル退治の場合と同様、一騎打ちをよしとして、従者たちには闘いを見守るよう命ずる。闘いが始まると、従者たちは灼熱の火を吐く竜に恐れをなして、近くの森に逃げこんでしまう。しかしだだ一人の従者は主君を見捨てえず、踏みとどまって、主君に加勢する。苦闘していたベーオウルフは助けを得て、ついに竜にとどめを刺す。しかしひべオウルフは竜に首筋を噛まれて致命傷を負っていた。ベーオウルフはまもなく息絶え、おごそかに葬儀が執り行なわれる。



『ベーオウルフ』写本第
1ページ